

カラフルでいこう！

高橋久美子

夏のはじめ、会費制の披露宴に出席した。新郎新婦とも50代半ば、再婚同士のカップルである。知人の新婦は、なにごとにもパワフルで、陽気な女性。晴れ姿が楽しみだ。ほかの友人たちはもう来ているかな。ドレスアップした彼女たちの姿を探して式場のドアをあけたとたん、私の足はとまってしまった。

祝宴が真っ黒、なのである。50人ほどの大人の集まりだ。立食式のパーティーのため所々に椅子も並べられているが、開宴前なので皆、

立ったまま談笑している。そのほとんどが、ブラックフォーマルのスーツやドレス姿。よく見れば渋い和服や、薄い紫色のドレスをまとった女性もいる。だが、全体が黒い。いそがしそうな給仕のボーイも、白いシャツに黒ズボン、そして私もレースの黒いワンピースを着ている。ラメ入りのストールを巻いてはいるが、ストッキングとハイヒールも黒。少しでもスリムに見せたい、という女心である。しかし――。

ここ数年、残念ながら葬儀への参列が増えていた。また3・11の大震災の後でもある。黒服の集団を見ると、いけないと思いつつ、どうしてもそちらを連想してしまう。うつむきながら入り、ふと中央のテーブルを見ると、料理の皿がすでにいくつか並んでいた。スモークサーモンでつくられた薔薇の花の周りには、黄色や紫のパプリカで型抜きされた、蝶々や鳥がとんでいる。サーモンのオレンジ、ハーブサラダの緑、トマトの赤……、鮮やかでカラフルなオードブルに見とれていたら、少しずつ元気がわいてきた。

赤、黄色、緑、黒、オレンジ……毎日のお弁当や献立には、多くの色を使うといいと言われている。色とりどりの料理は食欲がわく。トマトでおなじみのリコピン、ブルーベリーで有名なアントシアニン、緑茶のカテキン……、栄養素として知られているが、これらは植物の「色素」の名前でもある。多くの色をそろえれば、さまざまな栄養素をとることができる。

また、色素には植物の光合成によるダメージをやわらげる役目もあるそうだ。色素のその力は、光合成をしない私たちのからだにも同じ働きをし、人体のマイナス因子をとりのぞいてくれる。体調が整えば、ストレスにも強くなる。よい食生活を続けていけば、次第に精神も安定し、毎日をより元気に過ごせるという。

祝宴はお酒も入り、にぎやかに続いている。久しぶりに会う友人たちと、私も杯をかさねていた。テーブルにはたくさんの料理が並んでいる。添えられたレモンの黄色、人参のオレンジ。デザートコーナーには、紫の巨峰やいちご、マンゴーもある。料理の皿に箸をのぼしながら、私は思った。

カラフルでいこう！

自宅で、毎食色とりどりの料理をつくるのはなかなかむずかしい。でもポテトサラダなどの作り置きのおかずや、切ればすぐに食べられる野菜を常備し、心がけてみよう。けれど無理はせず、疲れている夜は、惣菜屋も利用するつもりだ。ドカンッとカツ丼ではなく、小さな野菜のおかずもいくつか添える。そしてかえるのは、食べ物だけではない。

大震災以降、一部では自粛が続いている。テレビの女性キャスターの服も、控えめな色あいが多い。これから季節は冬へと向かう。街はますます、くすんでしまうだろう。私はまず、やさしいピンク色のシャツかセーターを買いたい。黒や茶系など、ベーシックな色を選びがちなダウンジャケットも、今年はちょっと冒険してみようかな。鮮やかな色の服や小物は顔うつりがいいので、表情がいきいきとし、他人は明るい気分になるだろう。鏡を見たり、ひとにほめてもらえれば、着ている自分もきっと元気になる。友人を誘いでかける日がふえるかもしれない。そう、街が明るい色彩をまとえば、人々は集まる。人が集えば、きっと街はもっと活気づくだろう。

高らかな音楽とともに、式場のドアがひらいた。そこには、お色直しをした新婚カップルが立っていた。新婦はあんず色のロングドレス姿。拍手がわく。珍しく照れている新婦が手にした小さな、でも色とりどりの鮮やかなブーケは、シックなドレスにうつくしく映えていた。

(手本無き社会) 『無』による日本沈没

日本は、「変」に向かっている。
事件は痛ましい。理解を越える。
親が子を虐待する。殺す。子が親を殺す。
注意すれば殴り返される。肩が触れただけで逆上する。

学校のイ・ジ・メ・は止まず。生徒は自殺する。

立ち向かわない教師、校長。
権利のみ要求の親。義務は果たさず。
国旗に敬意を持たず。国歌は歌えず。
空き缶、空きペットは捨て放題。清掃すれども投げ捨てるの繰り返し。

騒音を撒き散らす。爆音を立てる。暴走する。
席を譲らず。見て見ぬ振りを決め込む。化粧する。

集中するは、「携帯画面」のただ一点。
静にすべきところでしずかにできず。挨拶すべきところで挨拶出来ず。

文句は言う。全ては他人の理由。
悲しむところで悲しめず。慰めるべきところで慰められず。
自分の世界のみ。

日本は、「変」に向かっている。

作り出した価値観は

- ・安い
- ・早い
- ・便利だ
- ・楽だ
- ・面白い

にフォーカス。

先端技術も、この価値観に向かう。

人間中心主義を謳いながら機械的主義。血は流れず。汗もかかず。

流れるは自動音声。

『では、ダイヤル何番を押して下さい』

『電車が参ります、黄色い線までお下がり下さい』

発する言葉は「無・温度」。

『ご注文が決まりましたらボタンを押してください』

『ご注文の品は全部お揃いでしょうか。』

会話に非ず。非人間的な声。

人の声より、むしろ機械音声に安堵感を覚える、この不自然さ。

人間が人間に対応してくれるモードは、一体何処、……。

ねえ、有料でいいからさ、ねえ、お金を払う

からさ、人としての「お手本」を見せて、「お手本」を演じて。

手本を渴望する精神集団が、生まれてもいい頃なのに、……。

日本は、「変」に向かっている。

心酔する作詞家。詩人。エッセイスト。芸術家。「阿久悠」さんの記事に目が触れる。

もう何年になるであろうか。日本人が壊れるのではないかと、不気味に感じ始めて、……中略。

不気味が天下を取る筈はなく、賢明な日本人は懸命に知恵を働かせて、狂った規範を修正するだろうと、……中略。

多分、ぼくらは傾いて立っている。

かつて日本人が絶対としていた社会の物差しを当てて見ると、一目瞭然、……中略。

いつの頃か、何かを得るために、トランプのパパのような「無」を掴まされたのだ。

無関心、無感動、無軌道、無気力、無神経、無責任、無恥、無茶、無定見、無頓着、無表情、そして無礼。 「阿久悠」

「阿久悠」さんは、日本人は『懸命に知恵を働かせて、狂った規範を修正するだろう』と書かれておられるが、本音をお尋ねしたくももう不可能。

「無」を取っ払うには、どうしたらいいの。

「無」を取り去るための「お手本」は、一体何処、……。

ここまで来たら、オイ、コラ、「無」を取らなければ地獄に落とすぞ、「恐怖を与える」以外に方法があるのだろうか。

「与・恐怖」は勿論ダメ。

エエ、本当にダメ、なの。

凡人の発想は、この「与・恐怖論」辺りが精一杯で力無し。

賢明な先人が懸命に知恵を働かせ、長い長い時間を掛けて「お手本」を作り上げ、何世代も何世代もバトンタッチさせて来た、「絶対なる精神」。

後に続く世代に繋がらなければ、人の命と同様寿命が尽きる。

国にも寿命があるということか……。

日本沈没。

凡句楽